

スパイの妻

行成薫



いよいよ3月。テストもありますが、今の学年での最後の1ヶ月、楽しんでくださいね。

今月紹介するのは、2020年2月に紹介した『心の傷を癒すということ』と、11月に紹介した『スパイの妻』。共通点は、NHK製作の神戸ロケ作品ということ。最初はドラマとして放送され、映画化に至りました。

『スパイの妻』はヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞、今年のキネマ旬報ベストテンの1位にも選ばれました。こちらは映画館で見たのですが、劇中に使われている音楽や衣装、建物などが本当に素敵で、劇場で観られるしあわせを感じました。ノベライズ版は映画とは展開が違うので、お互いを補完しながら楽しめると思います。蒼井優さん演じる聡子に変化していく様子に目が離せません。夢中で愛らしいのはそのままに、芯の強さが前面に出てくるところはすこぶるかっこよく、まさに「お見事！」というほかありません。

『心の傷を癒すということ』は2020年1月に放送。1年経って、今度は劇場版として帰ってきました。映画として公開されることで、より多くの人に見てもらえることをうれしく思います。1995年に起きた阪神淡路大震災から今年で26年。寒い冬の終わりが見えてきて、暖かさにわくわくしたくなる今の時期、当時はどんな気持ちですごしていたのでしょうか。ぼろぼろになった神戸の街、人々はどのように立ち直ってきたのでしょうか。3月11日で東日本大震災からは10年。神戸以外にも震災やその他の災害で傷を負った街はたくさんあり、その街のケアについて考えてしまいます。原作は映画で主人公となった安克昌先生の『心の傷を癒すということ』。産経新聞記者からの依頼で「被災地のカルテ」として連載されたものを書籍化。映画は先生ご自身の人生がメインですが、書籍では先生が当時感じておられたこと、精神科医としてどのように事態にあたっていたかなど、より深く先生の考えにふれることができます。もし今もいらっしゃれば、きっとたくさんの方に気づかれ、多くの方の心に寄り添ってくださったんだろうなあ、と思います。映画のコピー「誰も、ひとりぼっちにさせへん」は、ひとりひとりが持っていたい気持ちです。

この1年間、みなさんもたくさんしんどい思いをしたと思います。部活や行事ができなかったり、ずっとマスクをつけて、お友達との距離感にも気を遣ったり...今まで普通にしていたことが信じられないくらい、生活や考え方が変わりました。昭和・平成と続くふたつの作品の舞台となった神戸。令和の神戸に生きる私たちにもエールをおくってくれているような、心強い気持ちになれる2作品を味わってみてください

心の傷を癒すということ

安克昌